資格～俊樹とハブ～

カツオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

資格～俊樹とハブ～

【Ｎコード】

Ｎ０９０６Ａ

【作者名】

カツオ

【あらすじ】

頭が良く、面白い俊樹がハブにされてしまった。このストーリーは、かかわり合う人に物語があって、悲しい物語。これを見て、いじめを知ってください。

第一話　ハブ（前書き）

こんにちは。あなたはいじめにあったことはありますか？いじめは時にはかわいく、恐ろしいもの。あなたにもし、子供がいたら見てください。覚えのない痣がたくさんありませんか。あなたもいじめを知って、この悲しいストーリーを見てください。

第一話　ハブ

少年は崖の前に立っていた。何回も下を見ている。
波は激しくなっている。
少年の足下には子犬が寄り添ってくーんと言っている。
少年は子犬を見て笑っている。その後、抱いて言った。
「おまえも行くか？」

子犬が喜んで
「ワン！」
と泣いている。
「おまえは、いつでも一緒だ」

また子犬は
「ワン！」
と鳴いている。
少年は手に何かを握っている。紙だ。
「オレは、資格がない。だから、だから…」

少年はどんどん崖に近づいている。また下をみる。
少年は唾をごくりと飲んで、頭から下に落ちた。
子犬の鳴き声が聞こえた。

彼の名前は俊樹。
中学2年生だ。友達は多いし、顔もイケメンなので、結構もててた。
しかも頭がいいからテストの時は助かると言う人もいる。
でも、そんな人でもクラス全員を敵にすることはある。

でも俊樹は、とりあえず笑えること言って、みんなに勉強でも教えとけば、とりあえずいじめられないと思ってた。
次の日みんなは変わった。
でも、みんなが変わったと感じるのは俊樹だけだ。
みんな、俊樹とは話をしない。てか避けてる。昨日勉強を教えてもらって
「この御恩は忘れません」
とか言ってた奴も避けてる。
そうハブだ。
ハブとは、ハブにされた人は、もう人間として扱ってもらえない。
しかもハブは毒があるから避ける。
ハブは特殊ないじめの一種でどんな人でもされてしまう。
俊樹は困っていた。
なぜ、なぜみんなオレに話しかけてこない？ねえなんで？
すると、学級委員の小島が立ち上がった。
「ははは！昨日までの人気者がハブにされてやがんのははは！」

俊樹はそんなことは気にしない。
俊樹は小学校ですごいいじめにあっていた。
理由は頭がいいことをえばってるから。
何回もボコボコに殴られていた。
不幸の手紙も何枚も来た。開けてみるとカミソリメールで痛かった。
俊樹はそれが脳裏に残っていた。
小島は座った。ずっとニヤニヤしてる。
休み時間、いつもなら話しかけてくる奴がいるはずだが、誰も来ない。唯一、話しかけてくるのは、
「誰も話しかけてこないねぇ！まあ、オレがこれだけで終わるなんて思うなよぉ！」

その後小島は仲間を集めて話しかけた。
小学校の時もあった。仲間を集めた時、何をされるのかドキドキする。
小声だが聞こえた。
「まあ、とりあえず無視だな」

とりあえず、勉強でも教えとけばいいだろ。俊樹はそう思っていた。
数学で一番難しい直角三角形の証明だ。
これは特殊な証明もあって難しい。
「じゃあ、この問題を誰にやって貰おっかなー……」

全員目をそらす。
先生はさっと林を指した。林は立ち上がったが、何をいえばいいのか分からない。　林のところに紙が来た。その紙には証明がズラズラ書いてある。俊樹だ。
林はいらついた。こんなやつに教えた問題なんか答えたくない。
「わかりません」

「そうか。まあ復習すれば分かるから」

「はい」

俊樹はショックが隠しきれなかった。
いつもならありがとうとか言ってたのに。
休み時間にまた話しかけてこない。俊樹は他のクラスに行った。
俊樹は鈴木の所に行った。
鈴木は、俊樹の小学校時代に受けたいじめを救った人、でもそれの反動でひどいいじめを受けていた。今でも黙っている。

俊樹が来ると、みんな俊樹を避けていた。
それは俊樹も分かっていた。他のクラスにもハブ扱いされたことが分かった。
鈴木の机の周りが広い。まだいじめが続いている。
「どうした俊樹？」
「なんかハブ扱いされちまって、ハハハ」
「それ、いじめだぜ」
「えっ？」
ひそひそ声が聞こえる。俊樹が気づいて集中して聞いてみたら、
「ハブがしゃべるなよ」
「鈴木とハブ、お似合いだな」
「沖縄いけよ！沖縄」
おいおい、まあハブは沖縄出身だからって、もう押さえられなかった。
俊樹は自分のクラスに帰った。
机が出ていた。
俊樹はさっき鈴木のクラスにいた時、なんかに机が当たった音がしていたから、なんとなく予測していた。
俊樹は机を持ち上げると、中からネズミの死体がボコボコ出てきた。
「うわっ！」
小島がそれを聞くと、立ち上がって、

「おい！ハブ！ネズミを食ってみろよ！食え！ほらおまえら！」

小島が言うと、みんなが食えコールをした。

俊樹は我慢しきれなくなって走った。

走ると、いろんな声が聞こえる。もちろん、ハブという言葉は入っているが。

俊樹は学校をさぼった。

荷物は学校にある。でも、ハブに荷物はいらない。

人間は恐ろしいものだ。

いじめという鉄砲がねらうものは、すべての人間だ。

そして、いじめの鉄砲は、いろんな弾が打てる。

無視、暴力、かつあげ、精神的苦痛、そして、ハブ。

特にハブは恐ろしいものだ。

いざとなったらすべての弾を装備できる。一つの弾で、３つは装備できる。

やはり、ハブは恐ろしいものだ。

第二話　先公

俊樹は新しいバッグで学校に行く。
前の鞄は、俊樹をハブとして出迎える学校にある。
すれ違った人は、触れてもいないのに制服を叩く人もいれば、ひそひそ話をする人もいる。中には
「毒だ！」
とか言って逃げる奴もいる。
校門に着くと、俊樹は言った。
「げた箱の中だな」

昇降口に着くと、やはりげた箱の中にネズミの死体があった。
「ビンゴ」

教室に行くと、机が出てなかった。
机の上に菊も無かった。
だけど、紙があった。俊樹は手に取り見ると、
「放課後、体育館に来い。来なきゃもっとひどいことがあると思え
小島」

と書いてあった。
小島は俊樹が手紙を見ている姿を見ると、静かに笑った。
1時間目の社会は自習だった。みんな話してる中、俊樹は書いていると、
「やっぱり天才君はちがうねぇ」

と小島は言ってきた。
2時間目は国語で文法だった。
感動詞を見つけろとか言う問題だ。俊樹はそれが苦手だった。

俊樹は先生に指された。俊樹は答えることは出来なかった。
「日本人なのに日本語も出来ないのかバカだ」

みんなが笑っていた。先生も笑っている。
いろいろあって放課後になった。
俊樹は体育館の裏に来た。
体育館の裏は怖いぐらいに薄暗い。誰も通らない。
そこに、小島と仲間たちが来た。
小島と仲間たちは俊樹を囲んだ。
小島は指を鳴らして言った。
「みんなはどっち派かぁ！？」

仲間たちはドギマギしている。
「オレは、リンチ派だ！！」

そういって、小島は俊樹を蹴った。俊樹は口から血がでた。
「みんなやれぇ！」

そして、小島と仲間たち合わせて7人に俊樹は殴られた。
膝蹴りされたり、何回も殴られたり、鉄パイプで殴られたり、
とにかくボコボコにされた。
「これでいいだろう！おい、明日までに6万ぐらい持ってこい！わかったな！」

また俊樹は蹴られて置いてかれた。
ここはどこも通らない体育館裏。そこで俊樹は振り返った。
俊樹はほふく前進で校舎に向かった。
昨日クリーニングした制服がボロボロになっている。
でも、今は校舎に着くのが先だ。
校舎に着いた。

生徒は俊樹を見て、ワーワー言っている。でも、助けてもらえなかった。
俊樹はほふく前進で自分の机に向かった。
手を伸ばして、机の表面を触った。まるで点字のように、何が書いてあるかわかる。
「きもい」
「死ね」
「毒蛇」
俊樹は涙を流した。
次の日、俊樹は遅刻した。
毒蛇がいないクラスはどんな感じなのか見たかったからだ。
学校に着いて、クラスのドアから、毒蛇がいないクラスの休み時間を見てみた。
そのクラスには笑いが途切れなかった。
自分がいると、いじめられている毒蛇の醜さを小島が笑いのネタにしている。
このクラスには、俊樹、いや、毒蛇は必要なかった。
俊樹はいじめに耐えている時の自分の通学路を歩いてみた。
なんか、すがすがしい気分だった。
だが、情けなくなった。
どっちなのか俊樹も分からない。
苦しい場所から解放された気分と小島たちに負けた気分だった。
家に帰ると、母さんが手紙を見て涙を流していた。
俊樹は心配して聞いてみた。
「母さん、どうしたの？母さん」
「俊樹、あんた…、いじめられているの？」
俊樹は愕然とした。
ついに知ってはいけない人にも知ってしまった。俊樹は膝をついた。

手紙にはこう書いてあった。
「俊樹様のご家族様へ。この度、予想もしなかった俊樹さんの自殺。ご愁傷様です　２－３より」
俊樹は手紙を破った。その後、それを固めてゴミ箱に投げ捨てた。
「何だよ！あの手紙！？」
「ねえ！何で！何でいじめられているの！？」
母さんは俊樹を掴んで泣いていた。
俊樹は何も言えなかった。
母さんは俊樹も自分がなぜいじめられているのか分からないと察して泣いていた。
翌朝、俊樹は母さんに学校に行くなと言われた。
反論する気にはなれなかった。
二階の窓から同級生が学校へ向かうのを見た。
こんな景色を見たのは小学校の時以来だと俊樹は思う。
俊樹は母さんに黙って外に出た。
歩いてみると、いろいろな情景がある。
必死に公園デビューしようとする母親。
全然売れないのにまだ頑張って竿だけを売ってる人。
土地を買ってもらおうと必死に近所の家を回っているセールスマン。
こんな日にブラブラ歩くのもまあまあいいものだ。
俊樹は前から歩いてくる男が気になった。
あの男、昨日まで見覚えがある男だ。
近くに止まってる車、着慣れてるジャージ、筋肉質な体。
間違いないと俊樹は確信した。
「上島先生？」

上島先生は俊樹に気づくと、俊樹の方に走ってきた。
俊樹は走って逃げた。が、相手は体育教師。すぐ捕まった。
「母さん！」
「俊樹！なんでここに…」
「先生が来たけど、何も言うなよ！」
母さんは俊樹の忠告を破って、あの手紙を差し出した。
上島先生は何の手紙か気になって、封を開けた。
「…何だこれは！うちのクラスが、こんな手紙を出していたなんて」
「先生、息子は小学校の時、すごいいじめにあっていたのです。あれが脳裏に残って、またいじめにあったなんて、もう…」
俊樹の母さんは泣いていた。
先生は手紙を握りしめて、俊樹の部屋に行った。
俊樹は、なんか強い殺気を感じたのか、俊樹は中から鍵をしめた。
すぐにドアノブが揺れた。
「松田！開けろ！松田！いじめにあってるのだろ！」
俊樹はドア越しから言った。
「先生には関係ないです！」
「いや、オレのクラスだ！オレのクラスに問題があるのにオレが関係ないのか」
俊樹は黙った。
「開けてくれ！松田」
「オレには生きてる資格がないんです！」
先生の手が止まった。
「オレが生きてても、喜ぶ人なんかいないんです」
先生は、ちょっと黙って帰る準備をした。
「先生は、帰るからな。明日、学校に来いよ」
階段を降りる音が聞こえた。俊樹は安心して、鍵を開けた。
資格。俊樹はふいにそんな言葉を言ってしまった。

自分がいないとあんな変わるクラス。
もう自殺してくれ。
みたいな手紙。
俊樹は自分は死んでほしい存在だと確信した。今日のちょっと寒い日だった。
一方、2―3は、放課後まで小島たちは残ってた。
「松田、休んだか」
「あー！あの手紙が親に見られたのか！」
「どうする、上島の先公、どんな理由でも休んだ奴の家に行くからな」
「マジやばくね！」
「弱気になるな！」
小島は自分の頭をつついた。
「松田はここだけはいい。あんな熱血にいじめなんて問題ふったら、騒ぐに決まってる」
小島は拳を握った。
「もう一度、やるか」
小島は笑った。

第三話　ジョン

俊樹はまた休んだ。上島にそう言われたからだ。
今日も俊樹は公園を歩く。やっぱりいつもと変わんない町並みだ。
公園デビュー、セールスマン。
今日は暖かい。
でも、違うところがある。
やけに犬の鳴き声が多い。
しかも、威嚇してる感じの声だ。
散歩途中に犬がはち合わせになってけんかしているのだろう。よくある風景だ。
でも、複数の犬の鳴き声が聞こえる。そんな偶然あるのかと俊樹は思う。
しかも、一匹だけ
「キャンキャン」
と泣いている。聞くからに悲痛の鳴き声だ。
俊樹はこの鳴き声と小学校時代の自分の悲痛の泣き声を合わせてみた。
明らかに一致している。アクセントとか。
声がする方に走ってみた。
だんだん悲痛の鳴き声が大きくなってくる。声が大きくなる度に心配になってくる。
近所の公園だった。６体の犬が円になって何かを噛んでいる。
近づいてみてみると、子犬だった。血だらけでうずくまっていた。
「おい！何やってるんだ！」
子犬を噛んでいる犬を手で追い払った。
たまに手を噛まれる事もあるが、一生懸命追い払った。そして、や

っと追い払った。
「大丈夫か、おい平気が！おい！」
子犬からは何にも返事はない。
「おい！おい！おい！平気か」
子犬がかすかだが
「くぅん」
と声がした。
俊樹はいじめられて、初めてうれしいと思った。
ひとつ、自分の力でひとつの命がすくえた事。
ひとつ、自分と子犬が同じ身分だったこと。
家に帰って母親に飼っていいか訪ねた所、すんなり許してくれたから、俊樹はうれしかった。
同じく、母親もうれしかった。
いじめにあっている俊樹が生きなければならない理由が出来たからだ。
「牛乳にするかな。でも、やっぱり子犬用のドッグフードかな」
俊樹は必死に考えた結果、牛乳にした。
牛乳を皿に入れて、子犬の前においたが、何しろあれほど血だらけなんだから飲まない。
「とりあえず、手当かな。やっぱり」
そう思った俊樹は包帯とマキロンを持ってきて手当をした。
マキロンをガーゼにしみこませて子犬の傷に付けたら
「ギャウン」
と子犬が鳴いた。しみたそうだ。
「悪い！」
俊樹が言ったら、子犬がホッとしたように穏やかな顔になった。
俊樹も自然に笑顔になっていた。
一方、学校では小島と仲間たちが話していた。
何やら、俊樹を呼び出す作戦をたてている。
「どうだろうか、この作戦は」

「いいと思います」
「同じく」
「同じく」
「いいです」
「よし、あとはやるのみだな」
　子犬を飼ってから1週間が経った。子犬は元気になって、
「くうん」
しか言えなかったのに、今では
「キャン」
となけるようになっていた。
「子犬？」
　俊樹の家に状況を見に行った上島先生が聞いた。
「はい。俊樹が拾ってきたのです。あの子、前まで今でも自殺しそうな状況だったのですが、子犬が来てから、一生懸命に子犬の世話をしています」
「そうですか。よかったです」
　上島先生もほっとしていた。
「キャン！！キャン！！」
　子犬が俊樹に吠えた。俊樹が思うには、たぶん散歩したいと吠えているらしい。
「そうかそうか。散歩したいのか。じゃ行こう。…。名前決めてなかったな。よし、おまえの名前はジョンだ」
　ジョンはうれしいのかどうかわかんないがまた吠えた。
　俊樹とジョンの散歩道は、学校を休んでいる時に、一日に一回は俊樹が通る道だ。
　ジョンは楽しみながら歩いている。それを見て俊樹は笑顔になった。
「ほらジョン、あそこの公園では、いつも子供のために親が頑張っているんだ」
　俊樹がいつも見る公園デビューをジョンは不思議そうに眺めた。

「よし、行こう」
俊樹は一歩歩いた。そのとき、
ドガッ！！
俊樹は上を見上げてそのままひざまづき、倒れた。
俊樹は気を失う前に声を聞いた。
「ハハハハハ！！一発で倒れやがった！！」
「やっぱり弱いねぇ」
「子犬で気をまぎらわすなんて、ただのバカじゃん」
「なぁ！！」
「おい！！これだけですむと思うなよ！！」
俊樹はプルプル震えて気を失った。
なんかこんな感じ、久しぶりかもしれない。
暖かい感じ。ずっと、ずっとこうしたい気分だ。
暖かい感じを感じて目を覚ますと、蛍光灯が目に直撃した。
眩しいと感じ、薄目にして周りを見つめると、病室に母親が入ってきた。
母親は俊樹が動いてるのを見て、涙ぐみながら俊樹の所に行った。
「俊樹！！大丈夫！？」
「うん、まあ」
「よかった。あんたが救急車に運ばれるんだもの。母さん急いできたんだよ」
「そうか」
俊樹はあどけない返事をした後、何か足りない事を感じた。
そう、ジョンだ。
俊樹が気を失ってジョンはどこに行ったんだ。
もしかして、ジョンも何かされて動物病院か？
俊樹はいろいろパターンを考えて言った。
「オレが運ばれた時、雑種の子犬がいなかった？」
「子犬？俊樹が拾ってきたあれ？」

「そう。白いの」
「いなかったわよ」
「えっ！？なんで！？」
「いやだって、気失った時、手を離したんだから」
「探しに行く！！」
　俊樹がベットから飛び降りようとしたが、母親に止められた。
「だめに決まってるじゃない！！」
「何言ってんだよ！！大人の犬に集団でいじめられたんだぞ！！そんな犬がこの世界で一人で生きられると思うのか！？」
　母親は黙りこくっている。
「あいつはオレよりも最悪な人生を送ってるんだ！！親の暖かさ、大人の指導を一回もされていないんだ！！だから、オレがあいつの親になって、いつも一緒にいなければいけないんだ！！」
　俊樹は言った後、母親を突き飛ばしてどこかへ走っていった。
「誰か！！誰かぁ！！」
　俊樹はただひたすら走っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0906a/

資格～俊樹とハブ～

2010年10月12日06時27分発行